

書評

本田 明 著

かかりつけ医のための 精神症状対応ハンドブック

和田忠志

プライマリ・ケア現場の必然から生まれた書籍

今日のわが国では、精神症状と身体症状の双方を有する患者さんの行き場がなかなか見付からないという現実がある。この現実に苦慮する臨床家は多いであろう。このことに心を痛める著者は、プライマリ・ケアを実践する医師が精神症状を有する患者さんと果敢に対決する現実を見て、「いっそうの一般医療における精神科教育の必要性を実感」したという。この動機から生まれた本書は、プライマリ・ケア現場の必然から出た本であるといえよう。

本書は、精神科の書らしからぬ精神科の書である。著者は書名に精神科という言葉をあえて使わず、「精神症状対応」という言葉を使用した。しかし、本書は、「症状対応」のみならず、より深い内容を取り扱っており、精神科領域の実用的な基礎的知識や方法を学ぶのにも適した書である。とりわけ、著者の幅広い臨床経験から、さまざまな臨床の知恵を学ぶことができる。

著者は精神科と救急医学の専門医でありながら、幅広い身体疾患を対象とする在宅医療にも豊富な経験を有する。著者はプライマリ・ケアの深い造詣を持ち、精神科以外の多くの医師が遭遇する精神症状や、精神疾患に対する対応を簡潔にまとめている。本書の優れた点は、精神科領域に対する基礎的知識がほとんどなくても円滑に読める点である。身体疾患に起因する精神症状や、薬物を使用した場合の身体的な副作用などにも配慮がちりばめられており、かかりつけ医が使用しやすい内容になっている。家族対応の要諦や、介護保険に携わるスタッフに対

する留意点も記載されている。また、各項目には、使用すべき薬物の解説が随所に書かれており、すぐに使える知識が得られる。

また、介護保険の主治医意見書、障害年金の診断書、成年後見制度の鑑定書などの書き方や、認知症の鑑別診断別対応など、プライマリ・ケア現場で多くの医師が経験する事柄をうまく記載している。アルコール依存症やパーソナリティ障害など、一般医療現場の臨床家の頭を悩ます問題もしっかり言及されている。さらには、医療者自身のメンタルケアにも言及しているところは圧巻である。

ハンドブックというとおり、本書は項目ごとに独立した構成をとっており、どこから読んでも学べるようになっている。読者は、その都度、自分が出会った患者さんの症状に合わせてその対応を学ぶことができる。本書では冒頭の目次の後に提示症例一覧が挙げられており、読者が悩むときの事例対応に便宜を図っている。巻末には、向精神薬の一覧、知的機能検査(HDS-R, MMSE)が挙げられており、これも便利である。

おそらく、著者は比較的若い世代で、プライマリ・ケアや在宅医療を志す医師を読者対象としたと思われるが、経験を積んだ医師が読んでも著者の経験に照らして多くを学ぶことができる。もちろん、プライマリ・ケア現場で臨床に携わる若い医師にとっては、よい入門書になるであろう。

(あおぞら診療所高知潮江院長)

●A5 248 頁 2011 定価 3,570 円(本体 3,400 円+税) 医学書院